



Osaka Gakuin University Repository

Title	LI 構文の派生とその理論的帰結 (5) The Derivation of the LIC and Its Theoretical Consequences: Part 5
Author(s)	川本 裕未 (Yumi Kawamoto)
Citation	大阪学院大学 外国語論集 (OSAKA GAKUIN UNIVERSITY FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES), 第 81 号 : 1-19
Issue Date	2021.6.30
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

LI 構文の派生とその理論的帰結 (5)

川 本 裕 未

7. VP-LOC について

川本 (2020b) 第5節で非能格動詞文、他動詞文、非対格動詞文のそれぞれの統語構造として以下が提案された。

- (155) a. unergatives [TP T [_{VP} DP v [_{VP} V]]]
 b. transitives [TP T [_{VP} DP v [_{VP-TH} DP V_{TH} ([_{VP-LOC} V_{LOC} PP)]]]]
 c. unaccusatives [TP T [_{VP} v [_{VP-TH} DP V_{TH} ([_{VP-LOC} V_{LOC} PP)]]]]

そして、LI 構文や *there* 構文が成立するかどうかは、非対格動詞文 (155c) の統語構造の中に LOCATION 項を認可する V_{LOC} を主要部とする VP-LOC を持っていることが必要条件であると結論づけられた。

ところが、しばしば指摘されることであるが、非対格動詞でも LI 構文や *there* 構文を許さないものがある。さらに、非能格動詞や他動詞でも LI 構文や *there* 構文を生じるものも観察される。本節では、上記の川本 (2020b) 第5節での結論の反例となるようなこのような現象について議論し、これらの事例も (155a-c) の統語構造のもとで自然にその妥当性が導出されることを示す。

第7.1節で *break*、*melt*、*open* のような能格動詞の非対格動詞用法（自動詞用法）が *there* 構文を容認しない事実が、(155c) に基づいて導き出されることを示す。また第7.2節では本来 *there* 構文や LI 構文を許さない他動詞文、非能格動詞文のなかで、そういった構文が容認される場合の派生について

(155a-c) に基づいて考察する。

7.1 虚辞 **there** を含む構文

非対格動詞は (156a) のような LI 構文だけでなく、(156b) のような虚辞の **there** を使った構文の派生も可能である。

(156) a. Down the hill rolled a baby carriage.

b. There rolled a baby carriage down the hill.

一般に、虚辞の **there** は T の先端素性を満たすため SPEC-T に融合すると考えられている。これを、本論で展開している非対格動詞文の構造 (155c) の枠組みに当てはめるなら、(156b) の派生は次のような段階で、

(157) [_{T'} T [_{Edge}] [_{VP} rolled [_{VP-TH} a baby carriage rolled [_{VP-LOC} rolled down the hill]]]]

SPEC-T を埋めるため、**there** が融合された結果得られると考えられる。

(158) [_{TP} there [_{T'} T [_{Edge}] [_{VP} rolled [_{VP-TH} a baby carriage rolled [_{VP-LOC} rolled down the hill]]]]

しかしながら、この **there** が SPEC-T に融合するという分析は、次の (159a) のように、**there** が補文 SPEC-T と主文 SPEC-T の両方に融合して非文を形成することを阻止できないという問題点がある。

(159) a. *There seems there to be a problem.

b. [_{TP} there seems [_{TP} there to be a problem]]

虚辞の *there* と虚辞の *it* は、意味内容を持たず、T の先端素性を満たすだけのために SPEC-T に現れるという点では共通するが、その分布は相補分布をなす。

(160) a. There is a man in the garden.

b. *It is a man in the garden.

(161) a. *There seems that a man is in the garden.

b. It seems that a man is in the garden.

虚辞の *there* を使った文は (160a) の *in the garden* のような場所句を伴うことが多いが、以下の例のように場所句が明示的に現れていない文においても、例えば (162a) であれば *outside* や *at the door*、(162b) であれば *in the research plan* や *between John and Mary* のような何らかの場所の存在が前提となっている。

(162) a. There is a strange man.

b. There arose a problem.

つまり、(162a-b) のような文においても、話し手と聞き手の間で了解された非明示的な場所句が存在していると考えられる。高見・久野 (2002) は *there* のこのような機能を、「*There* が、場所を示す句と共起したり、場所を示す句を予測させるという事実は、その両者 [話し手と聞き手] で1つの場面が設定される (*scene-setting*) ことを示している」(50) と述べている。

それに対して、(161a-b) の「 *seems* 補文」の主文に非明示的な場所句が存在しているとは考えられない。試しに (161a-b) の主文に明示的な場所句を加え、虚辞の *it* や *there* を SPEC-T に融合すると、以下のようにいずれも非文となってしまう。

- (163) a.*There seems in the park that a man is in the garden.
 b.*It seems in the park that a man is in the garden.

there を使った (163a) は非文のままであるし、it の使用も (161b) では適格文であったのに場所句を加えたとなんにも非文になる。このように、「__ seems 補文」には明示的な場所句が入らないという事実は、非明示的な場所句も同様に存在しないことを示唆する。以上のことから、虚辞の **there** が SPEC-T に融合するためには、明示的であれ、非明示的であれ、場所句の存在が不可欠であり、したがって、虚辞 **there** の融合には次のような制約が課せられていると考えられる。

- (164) 虚辞の **there** が融合するためには、VP-LOC を持つ構造でなければならない。

break、melt、open のような能格動詞の自動詞用法は外項を持たないことから、一般に非対格動詞に分類されるが、非対格動詞であれば許容するはずの虚辞の **there** との共起とは馴染まない。

- (165) a.*There broke a glass in the kitchen.
 b.*There melted a lot of snow on the streets of Chicago.

この事実も、非対格動詞文の構造 (166) ((155c) を再掲) と虚辞 **there** の融合にかかる制約 (164) から容易に導き出すことができる。第5.2節で、非対格動詞用法 (自動詞用法) の能格動詞は、非対格動詞の構造 (166) 中の括弧で囲まれた VP-LOC を持たない構造、つまり (167) であると提案した。

- (166) unaccusatives [TP T [_{VP} V [_{VP-TH} DP V_{TH} ([_{VP-LOC} V_{LOC} PP)]]]]
- (167) ergatives [TP T [_{VP} V [_{VP-TH} DP V_{TH}]]]

(165a-b) には確かに *in the kitchen* や *on the streets of Chicago* といった場所句があるが、能格動詞は LOCATION 項を認可する VP-LOC を持たないことから、これらの場所句は付加詞にしかすぎず、項ではない。したがって、(164) によって *there* の SPEC-T への融合が退けられるのである。

本節では、虚辞の *there* が SPEC-T に融合する際に課される制約として、VP-LOC を含む構造でなければならないとする (164) を提案し、そこから *break*、*melt*、*open* のような能格動詞の自動詞用法には虚辞の *there* が生起できない事実を導き出せることを示した。

7.2 他動詞文、非能格動詞文

一般に、外項を持つ他動詞、および非能格動詞は虚辞 *there* の出現や LI 構文を許さない。

- (168) a. **There laughed someone cheerfully.*
 b. **In the room laughed someone cheerfully.*
- (169) a. **There eat sandwiches many people.*
 b. **In the shop eat sandwiches many people.*
- (170) a. **There put a book someone on the table.*
 b. **There put someone a book on the table.*
 c. **On the table put a book someone.*
 d. **On the table put someone a book.*

第5節で提案した非能格動詞文、および他動詞文の構造を再録する。

- (171) a. unergatives [TP T [_{VP} DP v [_{VP} V]]]
 b. transitives [TP T [_{VP} DP v [_{VP-TH} DP V_{TH} ([_{VP-LOC} V_{LOC} PP)]]]]

(171a) の非能格動詞は、虚辞の *there* や項としての場所句を認可する VP-LOC を有していないことから、(168a-b) に見られるように *there* の生起や LI 構文を許さないことが自動的に導出される²⁰。

一方、(171b) で表される他動詞文には、場所句を項として持たない、つまり VP-LOC を持たない *eat* のような動詞と、場所句を項として持つ、つまり VP-LOC を有する *put* のような動詞がある。前者は非能格動詞と同様に、そもそも虚辞 *there* や項としての場所句を認可する V_{LOC} を持たないので、(169a-b) に示されるように *there* の生起や LI 構文を容認することができない。それに対して、VP-LOC を持つ後者の動詞群は (170a-d) の派生において、ある段階で (172a) のような構造を持つ。

- (172) a. [_{VP} someone v [_{VP-TH} a book V_{TH} [_{VP-LOC} put on the table]]]]
 b. [_{VP} someone put [_{VP-TH} a book ~~put~~ [_{VP-LOC} ~~put~~ on the table]]]]

そして動詞 *put* は V_{TH} を経て v に移動し、(172b) の構造になる。(172b) の vP には外項 *someone* があるため、この vP はフェーズとなり、VP-TH 以下が意味部門および PF へ転送され、T をはじめとする vP の外側の要素にとつては vP 内部にある場所句と Agree の関係を結んだり、移動させることなどができなくなるため (170a-d) は非文になるのである。

以上見てきたように、非能格動詞、および他動詞はそれぞれ (171a-b) の構造を持つとすることで、これらの動詞群が *there* の生起や LI 構文を許さないことに対して正しく説明を与えることができる。

しかしながら、一部の非能格動詞、および他動詞の中には虚辞 *there* の生起や LI 構文を許すものがあることが指摘されている。まず、*take place*、*take*

root のような複合動詞は、他動詞の **take** を用いながら虚辞 **there** の生起、および LI 構文を許容する。

- (173) a. In that year took place a great renewal.²¹
 b. There took place a regular clearance of the Augean stables.
 c. There took root the idea of starting the academy with his co-founders.

これらの複合動詞の中の **place** や **root** は冠詞等の限定詞を欠いていることから DP まで投射せず、N の投射に留まっている。したがって、動詞 **take** の対格補部とは考えにくい。これらは動詞 **take** に編入されて、**take place**、**take root** はそれぞれ **occur**、**pervade** という意味を持つ1つの非対格動詞をなしていると考えられる。例えば (173a) は以下のような構造を持つ。

- (174) [_{VP} v [_{VP-TH} a great renewal V_{TH} [_{VP-LOC} [_{V-LOC} take place] in that year]]]

複合動詞 [_{V-LOC} take place] は V_{TH} を経由して v まで上昇する。その後、TP、および TopicP が投射し、T と Topic head が **in that year** をそれぞれの指定部に誘引することによって (173a) が派生される。

- (175) [_{TOPP} in that year [_{TP} in that year T [_{VP} take place [_{VP-TH} a great renewal take place [_{VP-LOC} [_{V-LOC} take place] in that year]]]]]

さらに次のような他動詞の例がある。Kayne (1979, 1994) は、(176a-b) および (177a-c) のような文は他動詞文でありながら、**there** 構文がぎりぎり容認できる (*marginally acceptable*) としている。

- (176) a. There hit the stands a new journal.
 b. There entered the room a strange man.

(Kayne 1994)

- (177) a. There reached his ear the sound of voices and laughter.
 b. There entered the room an indescribably malodorous breath of air.
 c. There crossed her mind a most horrible thought.

(Kayne 1979)

しかしながら、これらの文における意味上の主語、つまり (176a-b) の a new journal や a strange man、(177a-c) の the sound of voices and laughter、an indescribably malodorous breath of air、a most horrible thought は AGENT 項や CAUSER 項ではなく THEME 項と考えるのが妥当である。もし、意味上の主語を AGENT 項として解釈できるものと置き換えるなら、これらの文は容認不可能となるからである。

- (178) a. *There hit the stands a juvenile delinquent.
 b. *There hit balls the high-school softball coach.
 c. *There crossed the street the elementary-school children.

意味上の主語が THEME 項ということは、これらは内項ということになる。一方、動詞の直後の目的語 DP はすべて GOAL を表し、本稿のアプローチの LOCATION 項に含まれるものである (川本 (2020b) 注17参照)。すなわち、(176a-b) や (177a-c) は外項を持たない文であり、その構造が transitive 文の構造 (171b) であると考えすることは難しい。むしろ、外項を持たないという点で非対格動詞と同じ特徴を持つ。

これらの動詞は GOAL DP を欠いた場合、there 構文をつくることはできな

い。

- (179) a. *There reached the sound of voices and laughter.
 b. *There entered a nice breeze.
 c. *There crossed a most horrible thought.

また、「動詞 + GOAL DP」は隣接している必要がある。

- (180) a. *There hit a new journal the stands.
 b. *There entered a strange man the room.

さらに、これらの「動詞 + GOAL DP」は「発売される」「入ってくる」、「思い浮かぶ」といった出現や生起を表し、この点も非対格動詞の特徴と一致する。

これらの事実から、(176a-b) や (177a-c) は他動詞文ではなく、「動詞 + GOAL DP」がまとまって一つの非対格動詞としての構造 (166) ((181) として再録) を持っていると考えられる。

- (181) unaccusatives [TP T [vP V [vp-TH DP V_{TH} ([vp-LOC V_{LOC} PP)]]]

例えば (176a-b) の派生を考えるなら、(176a) の *hit the stands*、および (176b) の *enter the room* は、それぞれ *arrive at the stands*、*go into the room* という「非対格動詞 + 場所句 PP」に言い替えることが可能で、たまたま *enter* や *hit* という動詞が対格を付与する能力があるために格付与子としての *at* や *into* といった前置詞を必要とせず、場所句が *the stands*、*the room* という剥き出し (*bare*) のまま表出していると考えられる。つまり、(176a) では *the stands* が、(176b) では *the room* が LOCATION 項として存在するのである。LOCATION 項が認可されるためには V_{LOC} が必要である。(176a-b)

では LOCATION 項の the stand や the room が V_{LOC} 内部に取り込まれる形で存在し、その複合的な V_{LOC} がまず VP-TH に、次いで vP へと移動して、最後に there が融合して派生されると考えられる。

- (182) a. [_{TP} There [_{VP} hit the stands [_{VP-TH} a new journal ~~hit the stands~~ [_{VP-LOC} [_{V-LOC} ~~hit the stands~~]]]]]
 b. [_{TP} There [_{VP} entered the room [_{VP V} [_{VP-TH} a strange man ~~entered the room~~ [_{VP-LOC} [_{V-LOC} ~~enter the room~~]]]]]]]

このように、(176a-b) および (177a-c) のように他動詞が there 構文に現れている例は、非対格動詞の構造と同様な構造を持つことで、there の出現を許すことになる。ただ、純粋な非対格動詞と異なり、これらの動詞は補部の GOAL DP に対格を付与するという点で、この場合「非対格」動詞という名称で呼ぶことは正確とは言えないが、構造として非対格動詞の (181) と同じ構造を持つのである。

同様の考え方が次のような非能格動詞にもあてはまる。walk のような動詞は本来、(183a-b) が示すように、虚辞 there の生起、および LI 構文を許さない。

- (183) a. *There walked in the garden a strange man.
 b. *In the garden walked a strange man.

しかし、into the garden や out of the bushes のように GOAL や SOURCE のような動きの方向を示す場所句を伴うと there 構文や LI 構文が容認される²²。

- (184) a. There walked into the garden a strange man.
 b. Into the garden walked a strange man.

- (185) a. There ran out of the bushes a large deer.
 b. Out of the bushes ran a large deer.

これらの文においては方向を示す場所句を伴うことで、出現や生起といった非対格動詞と同じ意味を持つことになることから、前述の「他動詞 + GOAL PP」と同様に、これらの「非能格動詞 + 動きの方向を示す場所句 PP」がまともって一つの非対格動詞としての構造を持つと考えられる。それを示すものとして、動詞と動きの方向を示す PP が隣接していないとかなり容認度が下がるという事実がある。

- (186) a. ??There walked a strange man into the garden.
 b. ??There ran a large deer out of the bushes.

(184a-b) や (185a-b) では LOCATION 項の *into the garden* や *out of the bushes* が V_{LOC} 内部に取り込まれて複合的な非対格動詞 V_{LOC} が形成され、それが VP-TH、vP と移動する。そして SPEC-T に *there* が融合すれば (184a) や (185a) が派生され、*there* の融合の代わりに場所句 PP が SPEC-T に移動し、その後 TopicP に移動すれば (184b) や (185b) が派生される。

- (187) a. [_{TP} There [_{VP} walked into the garden [_{VP-TH} a strange man walked ~~into the garden~~ [_{VP-LOC} [_{V-LOC} walked into the garden]]]]]
 b. [_{TopicP} into the garden [_{TP} ~~into the garden~~ [_{VP} walked into the garden [_{VP-TH} a strange man ~~walked into the garden~~ [_{VP-LOC} [_{V-LOC} walked into the garden]]]]]]]
 (188) a. [_{TP} There [_{VP} ran out of the bushes [_{VP-TH} a large deer ~~ran out of the bushes~~ [_{VP-LOC} [_{V-LOC} ran out of the bushes]]]]]]

- b. [_{TopP} out of the bushes [_{TP} ~~out of the bushes~~ [_{VP} ran ~~out of the bushes~~ [_{VP-TH} a large deer ran ~~out of the bushes~~ [_{VP-LOC} [_{V-LOC} ran ~~out of the bushes~~]]]]]]]

本節では、本来 *there* 構文や *LI* 構文を容認しない他動詞や非能格動詞がそれらの構文を形成している例について考察した。どちらの場合も、そこで使われている動詞は、直後に位置する *LOCATION* 項と結合することで非対格動詞の構造 (181) と同様の構造を持つことになるため、*there* 構文や *LI* 構文の派生が可能になるのである。

8. まとめといくつかの理論的帰結

5回にわたって連載してきた本論では *LI* 構文の派生について考察し、*LI* によって前置された場所句は、*T* によって *Agree* に基づいて *SPEC-T* に誘引され、さらに *Topic head* によって誘引されて *TopicP* の指定部に移動しているとする事で、場所句が主語的な特性を有するとともに話題としての特性も持っている事実を説明できることを示した。また、この *LI* 構文で前置される場所句は付加詞ではなく、項として機能していることに注目し、*LI* 構文を許す非対格動詞文はこの場所句を *LOCATION* 項として認可する *V_{LOC}* を有しているとし、それに対して *LI* 構文の派生を容認しない非能格動詞は *V_{LOC}* を持たないと提案した。そして、*V_{LOC}* の投射である *VP-LOC* を選択できるのは、*THEME* 項を認可する *V_{TH}* であり、そこから、*V_{TH}* を持つ他動詞文には *VP-LOC* を選択するもの (*put* など) と *VP-LOC* を選択しないもの (*eat* など) があることが導き出された。さらに、このような他動詞に見られる *V_{TH}* による *VP-LOC* の選択の随意性を、非対格動詞にも一般化することによって、*break* や *open* などの能格動詞を *V_{LOC}* を持たない非対格動詞として捉えることが可能となり、能格動詞の非対格動詞用法 (自動詞用法) において、*there* の生起や *LI* 構文の派生が許されない事実を説明できることを示した。

さらに、一般的には **there** 構文や LI 構文の派生を許さない他動詞や非能格動詞でも、これらの構文を容認する場合があるという事実に対して、このような文は項となる場所句を有しており、それを認可する V_{LOC} とその投射である VP-LOC を選択する V_{TH} が存在し、動詞は直後の LOCATION 項の場所句と結合することで非対格動詞の構造と同様の構造をなし、その結果 **there** 構文や LI 構文を許容することになるということを示した。

以上の議論を進めていく中でいくつかの理論的帰結が導き出された。第4.1節では、文主語や叙実述語補文の命題は断定内容にはなり得ず、話者はその命題を前提としており、それらは既出・既知情報であることから、文主語および叙実述語補文の ForceP には TopicP や FocusP が投射できないこと、さらにこのことは同様の特性を示す、定の制限用法の関係代名詞節にも当てはまり、このタイプの関係代名詞節も TopicP や FocusP を投射していないことが示された。

また、第4.4節では、標準英語の補文 C が持つ時制素性が EPP 素性を持たないのに対して、アイルランドで話されている英語変種の Hiberno-English の補文 C の時制素性は EPP 素性を持っていることが導かれた。

LI 構文の派生について考察するなかで帰着したのが、項である場所句を持つ文の構造として VP-LOC、およびその主要部の V_{LOC} の存在である。第5節では、VP-LOC の有無を非能格動詞文、他動詞文、能格動詞文にも適用することで、非対格動詞文以外の構文も含めて、以下のように統一的にそれぞれの統語構造を表すことができることを示した。

- (189) a. unergatives $[_{TP} T [_{VP} DP v [_{VP} V]]]$
 b. transitives $[_{TP} T [_{VP} DP v [_{VP-TH} DP V_{TH} ([_{VP-LOC} V_{LOC} PP)]]]$
 c. unaccusatives $[_{TP} T [_{VP} v [_{VP-TH} DP V_{TH} ([_{VP-LOC} V_{LOC} PP)]]]$

そして、LI 構文の派生、および虚辞 **there** の融合のためには、VP-LOC を持

つ構造でなければならないと結論づけた。

(189a-c) をさらに統一化・単純化するならば、以下のように外項を持つ文と外項を持たない文の二分化を図ることが可能かもしれない。(189a-b) は外項を持つという点で共通している。さらに、本来、目的語を取らない非能格動詞の中には、(190a-g) のように同族目的語 (cognate object) を取り、他動詞のようにふるまうものがある。

- (190) a. The man laughed a sad laugh.
 b. The girl smiled a sweet smile.
 c. The baby slept a sound sleep.
 d. The young actress dreamed an impossible dream.
 e. The old man sighed a weary sigh.
 f. It's easy to talk the talk.
 g. You need to walk the walk first.

上記のような文では同族目的語が明示的に動詞のあとに現れているが、明示的な目的語が表れていない非能格動詞も非明示的な目的語を持っていると仮定するならば、非能格動詞文の統語構造 (189a) は他動詞の統語構造 (189b) に包括され、つまり (190a-g) のような構文は (189a) ではなく、(189b) の VP-LOC を欠いた構造であると考えることができる。このことから、(189a-b) を1つにまとめ、文の構造を以下のように単純化することが可能かもしれない。

(191) a. transitives and unergatives:

$$[{}_{\text{TP}} \text{ T } [{}_{\text{VP}} \text{ DP } \text{ v } [{}_{\text{VP-TH}} \text{ DP } \text{ V}_{\text{TH}} ([{}_{\text{VP-LOC}} \text{ V}_{\text{LOC}} \text{ PP})]]]]$$

b. unaccusatives: $[{}_{\text{TP}} \text{ T } [{}_{\text{VP}} \text{ v } [{}_{\text{VP-TH}} \text{ DP } \text{ V}_{\text{TH}} ([{}_{\text{VP-LOC}} \text{ V}_{\text{LOC}} \text{ PP})]]]]$

外項を持つ文は (191a) を、外項を持たない文は (191b)²³ をその構造として

持つのである。

非能格動詞文において虚辞 *there* の出現や LI 構文が容認されないことに対して、第7.2節では非能格動詞文の構造 (189a) が VP-LOC を持たないので、このような構文は排除されると説明したが、(191a) では VP-LOC を持つ構造の可能性も示されており、この説明は有効ではなくなる。しかしながら、たとえ VP-LOC を備えた構造であったとしても、非能格動詞文は他動詞文同様、外項を持つので *vP* がフェーズとなり、T 主要部や SPEC-T のような *vP* の外側の要素にとっては *vP* 内部にある場所句と *Agree* の関係を結んだり、移動させることなどができないことから、虚辞 *there* の SPEC-T への融合や場所句の SPEC-T への移動は不可能である。

例えば、動詞 *sit* を使った (192) で「ソファーに座った」という行為を表す意味と「ソファーに座っている」という状況を表す意味の間で曖昧性が生じるのは、動詞 *sit* が主語 *Sam* を外項として持つ (191a) の統語構造と、外項を持たず内項の *Sam* が主語となっている (191b) の2つの構造を許すからである。

(192) *Sam sat on the sofa.*

それぞれの動詞は、どの統語構造をとることができるのか、どの構造をとることができないのか、また、VP-LOC を持つのか持たないのかについての情報を語彙特性として有していて、子どもは各動詞とその語彙特性を併せて獲得していくと考えられる。

注

20 第8節で (168a-b) が非文になることの説明の代案を提示する。(191a) 以降の議論を参照のこと。

21 (173a) において前置された前置詞句は場所句ではなく、時間を表す表現

(以下、「時間句」と呼ぶ)である。このように時間句も前置してLI構文を派生することが可能であることから、VP-LOCは場所句だけでなく、時間句も項として認可していることになる。時間句は時間軸上の場所を示しているという意味で、場所句の一種と捉えることが可能なかもしれない。前節で、高見・久野(2002)が虚辞のthereの機能として、話し手と聞き手の間での場面を設定する(scene-setting)ことと述べていることを紹介したが、その虚辞thereを認可するVP-LOCは「場面設定」のための変数として場所のみならず、時間をも同様に認識していることになる。

- 22 非対格動詞文の特徴のひとつが完了相(telicity)を表していることである。そしてinto the gardenのような着点を示す語や、out of the bushesのような起点を示す語は、完了相を表すことに貢献する。つまり、起点や着点が示されることで、出来事の成立や完了を捉えることができるのである。その意味で、into the gardenやout of the bushesのような場所句は、この文の解釈上必要な項として機能していることになり、それ故に(184a-b)および(185a-b)は場所句を項として持つ(181)の構造を持つと考えることができる。
- 23 受動文も外項を持たないので、(191b)は非対格動詞文のみならず、受動文の構造でもある。受動文(ia)の構造は(ib)によって示される。

(i) a. Many books are placed on the desk.

b. [_{TP} Many books are [_{VP} placed [_{VP-TH} many books placed [_{VP-LOC} placed on the desk]]]]

参考文献

Chomsky, Noam (2000) Minimalist Inquiries: The Framework. In: Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka (eds.) *Step by Step*:

- Essays on Minimalism in Honor of Howard Lasnik*, 89-155. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2001) Derivation by Phase. In: Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A Life in Language*, 1-52. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2008) On Phases. In: Robert Freidin, Carlos P. Otero and Maria Luisa Zubizarreta (eds.) *Foundational Issues in Linguistic Theory*, 133-166. Cambridge, Mass: MIT Press.
- 川本裕未 (2019a) 「LI 構文の派生とその理論的帰結 (1)」『大阪学院大学外国語論集』第77号.
- 川本裕未 (2019b) 「LI 構文の派生とその理論的帰結 (2)」『大阪学院大学外国語論集』第78号.
- 川本裕未 (2020a) 「LI 構文の派生とその理論的帰結 (3)」『大阪学院大学外国語論集』第79号.
- 川本裕未 (2020b) 「LI 構文の派生とその理論的帰結 (4)」『大阪学院大学外国語論集』第80号.
- Kayne, Richard S. (1979) Rightward NP Movement in French and English. *Linguistic Inquiry* 10: 710-719.
- Kayne, Richard S. (1994) *The Antisymmetry of Syntax*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- 高見健一・久野暲 (2002) 『日英語の自動詞構文』東京：研究社.

The Derivation of the LIC and Its Theoretical Consequences: Part 5

Yumi Kawamoto

This whole article, published in five parts, investigates the derivation of the Locative Inversion construction (LIC), exemplified by the sentence *Down the hill rolled a baby carriage*, which appears to involve inversion of a locative phrase with the thematic subject. Focusing on the fact that the fronted locative phrase in the LIC exhibits characteristics of both the subject of a sentence and the fronted focused phrase in the topicalization construction, we argue that the LIC locative phrase moves to SPEC-T first and then moves to the TopicP (Parts 1-3).

In Part 4, we further argue that the LIC, as well as the existential *there*-construction, is allowed only by an unaccusative verb construction carrying VP-LOC, headed by V_{LOC} , which licenses LOCATIVE arguments in the following structure:

- (i) [_{TP} T [_{VP} V [_{VP-TH} DP V_{TH} [_{VP-LOC} V_{LOC} PP]]]]

However, the LIC and *there*-construction are observed also in some transitive sentences and unergative sentences such as (iia-b), which seemingly contradicts the conclusion reached in Part 4.

- (ii) a. There entered the room a strange man.

b. Into the garden walked a strange man.

In Part 5, we present some evidence which indicates that the verb and the following locative DP in (iia) (*entered* and *the room*) and the verb and the locative PP in (iib) (*walked* and *into the garden*) are amalgamated into unaccusative verbs. These amalgamated unaccusative verbs are assumed to be put into the derivation as V_{LOC} in (i) and the locative DP *the room* and the locative PP *into the garden* are licensed as LOCATIVE arguments. This leads us to consider (iia-b) are not counterexamples to our model anymore.

By pushing forward with the hypothesis of VP-LOC, we can ultimately reach the logical conclusion that the syntactic structures of English sentences are basically classified into two types: the one that has an external argument and the other that lacks an external argument. Each type can have VP-LOC optionally. The LIC is only derived from the syntactic structure which comes with VP-LOC without an external argument.